

昭和三〇〜四〇年頃の県立図書館周辺の人々 石井 敬士

はじめに

私が県立図書館に就職したのは、昭和三九年二月一日

である。一〇月一日に東海道新幹線が開業、一〇日から二

五日まで東京オリンピック開催ということで日本中がわき

たっていた。奉仕課普及係に配属された。自動車文庫と通

称し、県内の市町村をB M（ブック・モビル、移動図書

館車）「さがみの号」（当初はバス型、後にマイクロバス）

と配本車一台で定期的に巡回しており、私の当初の担当は

津久井四町だった。さがみの号は定まった駐車場所に一時

間程駐車して本の貸出を行ない、配本車は町の読書施設を

巡回していた。約三年間、担当し、四三年から資料課閲覧

係の相談室に異動した。

以下、本館開館から昭和四七年の文化資料館開館あたりまでの本館周辺の状況を伝聞を含めて記してみる。

○施設・組織・職員・資料・その他

（一）施設

私の就職した昭和三九年は本館建設一〇周年に当たる。

県立図書館は二九年一〇月一日発足、十一月四日開館式、

五日から業務を開始した。あわせて隣接して建てられた音

楽堂は十一月から開館した。前川國男氏設計の両館は戦後

の代表的建築として評価されている。

（二）組織・職員

館長・副館長・五課・一〇係の構成で図書館部門は三課

六係（整理課―受人係・保管係、奉仕課―館内奉仕係・館外奉仕係、視聴覚課―整理係・奉仕係）であった。

本館は戦後の建設であり、都道府県では四六番目であった。サービスは新しい要素の展開、相談室の開設など順次実施されたが、一方で資料についてはゼロからのスタートだった。この一〇数年間、他都道府県に追いつくことは極めて大変だったと思われる。沓掛伊左吉整理課長は書誌学者の斎藤昌三氏のお弟子さんであり、横浜市図書館から移られて、収書・整理にあたられた。個人的には江戸時代の貸本屋などについての著作がある。奉仕課長は二代目の斎藤武雄氏であったが、江戸の名主で、「東都歳時記」や「江戸名所図会」などの著者斎藤月岑げっしんの孫である由、よく話題にされていた。また、視聴覚課長の関晶氏は視聴覚資料を専門とする一方で、私的には川柳路吟社を主宰、「路」を発行する、一方の宗匠であった。

私の所属した前述の普及係は県内の市町村を分担して巡回し、何回かは現地で宿泊したが、当時の道路はデコボコ

で胃をこわすので気をつけろといわれたり、津久井の宿屋では未だ五右衛門風呂があり貴重な体験もした。

（三）資料

市町村と異なり、県立図書館の資料を最初から集めることは大変な作業であったと思われる。それも館内用だけでなく、館外用・視聴覚用と分けて集められた。昭和三四年に県立川崎図書館が開館したが、収書については、県立図書館は総合的な収書と人文科学、社会科学部門を、県立川崎図書館は自然科学、工業関係部門を重点に収書することとなった。憶測で言ってはと思うが、昭和四〇年代までの資料収集の内容は素晴らしいもので、他県立のレベルを超える位の力をつけてきたと思われる。

（四）その他

私は小田原出身で、横浜も殆んどきたことがなく、東京の大学往復だけというところを津久井郡巡回担当ということで、不安も大きかったが、慣れてくると津久井の風光や人々への親しみも湧いてきた。三年後、相談室に異動とな

ったが、以後、レファレンス、協力車、神奈川県図書館協会・関東地区公共図書館協議会など団体の事務を担当させてもらい、図書館の機能やサービスの多様性を学んだ。本を覚える方法としては閲覧室の書架を順次見ることとし、朝の配架時等を利用して、一日五〇冊程度(二棚位)をざっと見ることを始め、何年かで閲覧室全部にあたり、書庫内については、レファレンスのかたわら、少し範囲を広げてみることにした。分類は一冊について一分類しか与えないため、分類されない項目、郷土関係や特定テーマにあたることも含め、本の各々の感触を確かめていたともいえる。私は小田原から通いを続けたので、通勤時間は往復で四時間、勤務時間を入れて、半日は仕事関連だった。東戸塚駅の造成、横浜ランドマークタワーの建設等、毎日、工事の進捗状況をみせていただいた。

○図書館周辺の見所やゆかりの人々

(一) 神奈川奉行所跡

当時神奈川県文化センターといわれていた地域、県立図書館、音楽堂、青少年センターのところは、安政六年(一八五九年)六月、水野筑後守忠徳以下五名が外国奉行を命ぜられて戸部村宮ヶ崎に設けられた奉行役所(戸部役所)で開港事務を行ったところである。青少年センター、青年会館(現存せず)は図書館、音楽堂と同じ前川國男氏の設計である。

(二) 掃部山公園と井伊掃部頭の銅像

明治五年、横浜、新橋間の鉄道敷設の際、この地に機関車の水池が設置されたので鉄道山と呼ばれた。その後、井伊大老ゆかりの彦根藩士が藩主の開港時の功績を顕彰して造園。大老の銅像を建立し、掃部山と名付けて記念とした。大正三年、銅像とともに園地が横浜市に寄贈され、掃部山公園となった。銅像は第二次大戦中の金属回収により一時撤去されたが、昭和二十九年の開国百年祭の際再建され、公園も再整備された。

(三) 横浜の総鎮守伊勢山皇大神宮と成田山横浜別院

紅葉坂を上ってきて、青少年センターを右にみて左側に
ある皇大神宮は明治三年、梶権知事井関盛良もりともが伊勢から勧
請し、神奈川の宗社、横浜の総鎮守としたものである。伊

勢山の隣りが野毛山に続いた。境内には、明治一〇年西往
陣亡軍人之碑や万葉歌碑などがある。皇大神宮より野毛大
通り寄りに成田山横浜別院がある。明治三年、高嶋嘉右衛
門、森田友昇ら横浜地方の信徒の熱望により新勝寺塔頭延
命院を移し、成田山延命院として、本尊の分霊を勧請して、
横浜別院（通称野毛山不動尊）が設けられた。境内は高台
にあり、横浜港方面を眺望する景勝地になっている。

(四) 金星日面経（通）過観測地跡

紅葉坂に面して碑がある。明治七年一二月九日に行われ
た金星日面経（通）過観測は、フランス隊は長崎と神戸、
アメリカ隊は長崎に、横浜はメキシコ隊が担当して観測に
あたった。長崎と神戸には観測の記念碑が建立されたが、
横浜には記念碑はなく、当初は観測機械の据え付けられた
礎石（六〇センチ角、高さ四〇センチ）が一個残されてい

るのみであった。野毛山不動尊の裏側の突端近くの民家の
庭にあり、私は現役当時それを見に行つて塀越しにみたが、
あまりかわりばえのしない印象の石であった。

(五) 野毛坂の横浜市図書館

横浜市図書館の発祥は大正一〇年六月一日、横浜公園
内に閲覧所が設けられたのが最初である。大正一二年に関
東大震災に遭い、火災により蔵書を焼失、以後、中村町や
同公園内の時代を経て、新館の建設地が野毛坂の中腹、旧
老松小学校校地跡（現在地）と定められ、昭和二年八月五
日落成した。その後、現中央図書館が前図書館の跡地に隣
接の老松会館や民有地を買収して、平成六年二月一部開館、
四月全面開館した。地上五階、地下三階、塔屋一階で、一
階エントランスコーナー、総合カウンター、各種コーナー、
二階移動図書館、団体貸出、三階一般調査・ヨコハマ資料、
四階社会科学・自然科学、五階人文科学部門、地下一階は
AV関係、ホール・学習室等、書庫は地下一〜三階である。
また、コレクションとしては、

(1) 亀田文庫 亀田病院の開設者亀田威夫氏収集の忠

臣蔵関係資料一四一六点

(2) 中村家文庫 浦賀奉行組同心中村容介の職務上の

手録を中心としたもので総数四五点

(3) 横浜関係資料 芳虎、貞秀、芳員、三代広重など

の横浜絵、絵図、瓦版など四五六点

等を所蔵していた。

横浜市の図書館は戦前からの一館だけであつたが、昭和四八年の「横浜市総合計画一九八五」より、方面別図書館の建設が進められることとなり、四九年磯子、五二年山内、五三年戸塚が開館、現在では全一八区に開館、中央図書館は二六五万冊の収容能力を持っている。

(六) 岳人小島烏水居住の地

烏水小島久太は明治六年二月二十九日、香川県高松市に生れ、同一一年東京神田から横浜市西区に転入した(西戸部町八九八、現西戸部町二一九五)。戸部小に入り、老松小に移つたが、同級に久保天随がいた。さらに、一三年、

烏水と共に日本山岳界の開拓者となつた岡野金次郎が入学している。また、友人の山崎紫紅も烏水より二年遅れで戸部小に入学している。烏水は二五年横浜商業学校を卒業、

二九年に横浜正金銀行に勤務し、昭和五年八月同行を退職するまで在職三四年、サンフランシスコ支店長なども勤めた。一方で、山岳登山家、文芸評論家、紀行作家など、多方面で活躍した。三五年、岡野金次郎と日本登山家最初の槍ヶ岳登頂に成功した。また、四一年、石川啄木が函館から三河丸で横浜に上陸した際、横浜正金銀行に烏水を訪ね、横浜に一泊、上京したという。浮世絵の収集・研究家としても知られる。昭和二三年二月一三日没。七四才であつた。

(七) 御所五郎丸の墓

御所山二四番地に古い五輪塔が祀

られ、「史蹟御所之五郎丸の墓」という標柱が建てられている。昭和四〇年五月一五日の日付けで、御所町会五郎丸会となつている。

建久四年(一一九三年)五月二八日、源頼朝が富士の巻

狩りをした夜、曾我兄弟が父の仇工藤祐経すけつねを討ちとった、いわゆる曾我の仇討ちの際、本懐をとげさせた後、五郎丸は第五郎時致ときむねを捕え頼朝に差出した。当地の有志の五郎丸は勇と情を備えた武士の鑑として、そして、御所山の地名も御所五郎丸よりつけられたとして、昭和三八年横浜市に寄贈し、永久保存されることとなった。

○ゆかりの地名

前述のように私は小田原から通っていたのだが、東海道線を横浜で乗り替え、京浜東北線で桜木町駅まできて、一六号線沿いに横浜方面に歩いて紅葉坂を上っていた（現在の横浜よりの改札口はなかった）。一六号線を渡ると、その先に橋があり、さらに音楽通りとなっているが、橋の下には以前川が流れていたという。桜川といい、駅の方へ流れていた。明治五年、桜木川に沿って桜木町と命名される。川名は後に桜川となり、その後地は桜川新道と呼ばれた。紅葉坂には桜の並木があったという。

以下、周辺についていくつか紹介する。

西区が中区から分離したのは、昭和一九年四月一日、四三町だった。そのうち、県立図書館周辺は戸部をめぐる町で、戸部町、西戸部町、境之谷、御所山町、西前町、戸部町、藤棚町、浜松町、老松町、花咲町、紅葉ヶ丘、伊勢町、宮崎町だった。紅葉ヶ丘は紅葉坂の上の丘から、伊勢町は皇大神宮の遷座により、宮崎町は皇大神宮にちなみ、岬の先にあつたことによる。

海岸よりには明治五年の鉄道敷設に伴う高島町（高島嘉右衛門に因む）などが設けられた。

○西区にゆかりの文化人・文学者

『横浜西区史』（横浜西区史刊行委員会 一九九五）によると次のような人々がいた。

(一) 小説家

有島三兄弟（父武は第八代横浜税関長、月岡町―現老松町の税関官舎に住んだ。長兄武郎は同居。生馬・淳は同官

舎生)、岩藤幸夫(現桜木町生)、長谷川伸(日ノ出町生)、

吉川英治(横浜ドックの船具工、西戸部町住)、山本周五郎

(久保町住、西戸部小から西前小を卒業)、獅子文六(弁天

通生、月岡町の税関官舎跡地に住む、老松小)、島尾敏雄(戸

部町生)、尾崎士郎(野毛町に住む)、加藤武雄(西戸部町

に住み、戸部小の補助教員となった)、岡本かの子(二五年、

両親と共に野毛山の別邸に滞在)、今東光(老松小、伊勢佐

木町生)

(二) 詩歌・俳句・川柳

伊良子清白(詩・文庫派、戸部町住)、平野威馬雄(詩、

混血児救済運動にかかわり「レミの会」結成、老松町生)、

福田正夫(詩、「民衆派」、高等戸部小に入学)、飯岡幸吉(歌、

アララギ派、掃部山公園に歌碑、花咲町生)、飛鳥田麗無公(れいむこう)

(俳句、「石楠」同人、県庁に勤め伊勢町官舎に住んだ)、

中村汀女(俳句、「風花」主宰、西戸部町の税関官舎に住ん

だ)、阪井久良伎(川柳、「川柳久良伎社」をおこす。父が

県庁に勤め、野毛の役宅生)

(三) 評論家、劇作家など

北村透谷(明治一六年、県庁官舎に寄寓して県会の臨時

書記となった)、山崎紫紅(劇作家で明治八年三月戸部町生。

戯曲集として「史劇十二曲」「史劇十種」がある)、小島鳥

水(前記参照)

○桜木町駅・三菱ドック・闇市

私の朝の通勤コースは前述のとおりであったが帰りは、

紅葉坂を下り、音楽通りを通過して野毛に行き一杯やって帰

るのが常になっていた。当初飲めなかったのが自動車文庫

の巡回(当時月に数回泊りがあり、土地の人とも飲む機会

があった)などで鍛えられた?のかもしれない。音楽通り

は音楽堂に因むと思うが労音の事務所などもあった。本町

小学校のところにはガス会社が設立され、明治五年には、

わが国最初のガス灯が大江橋から馬車道、本町通りにつけ

て灯されたという。野毛の大通りを渡ると野毛の飲み屋街

となるが、当時(四〇年頃)は駅前のおシテイはなく、

闇市であった。何百軒の飲み屋があり、みなとみらい地区はなかったので皆そちらを利用していた。一六号線を渡り、桜木町駅に出る。ご承知のように同駅は明治五年の新橋・横浜間の鉄道開業地である。九月一二日、新橋（汐留から改名）、横浜（現在の横浜駅は三代目、桜木町駅）間で開業した。新暦で一〇月一四日にあたり、鉄道記念日となっている。鉄道発祥記念碑や初代鉄道建築師長エドモンド・モレルの顕彰碑がある。

駅の海側には三菱ドックがあり、長谷川伸の『ある市井の徒』（朝日新聞社 一九五二）や吉川英治の『かんかん虫は唄ふ』（春陽堂 一九三二）などを読むと当時のドックの様子が偲ばれる。また、「日本丸パーク」や新港倉庫などに港の風景が思い起こされる。平成以降、ランドマーク・タワー以下、「みなとみらい」の街並みの形成が進められている。

おわりに

嘉永六年（一八五三年）のペリー来航、翌年の「神奈川条約」（「日米和親条約」）の締結により日本は開国した。その後、安政五年（一八五八年）の「日米修好通商条約」（安政条約）を経て、六年六月二日、米英仏露蘭に対し、神奈川（実際は横浜）が開港した。保土ヶ谷宿、戸部村、野毛浦を経て現在の伊勢佐木町から吉田橋を渡り居留地へ入ったのである。県立図書館の山側（戸部方面）を居留地への道が通っていたわけである。

私は前述のように、昭和三九年一二月から平成一五年三月まで、両県立図書館に三六年間お世話になった。今回その最初の一〇年間を回顧してみたのであるが、旧文化資料館や横浜能楽堂はなく、現在青少年センターの前のマンシヨンのあるところには婦人会館や後に青少年会館が建てられていた。四七年に文化資料館ができるまでは民間地が少なかった。

県内の図書館であるが、神奈川県図書館協会の発行する『神奈川県の図書館 一九六四年版』によると、加盟四五

館のうち県立三館（県立、県立川崎、県立金沢文庫）、市町立二六館（含公民館図書室二館、市立分館二館）、大学その他一六館であった。市町立図書館二六館のうち、市立一九館、町立七館、であり、横浜市は未だ一館であった。

当時の県立図書館の蔵書は、県立一五九、九四〇冊、県立川崎六五、八七六冊、職員は県立七一一名（除音楽堂）、県立川崎三四名であった。

紅葉坂を上り、右に入ると左側に少し前にできた青少年センター、正面に音楽堂、そのすぐ左手に図書館があり、その偉容は素晴らしいものであった。いずれも前川國男氏設計ということで、驚き感嘆したものである。新県立図書館建設と合わせ、今後ますますの発展を祈念するものである。